

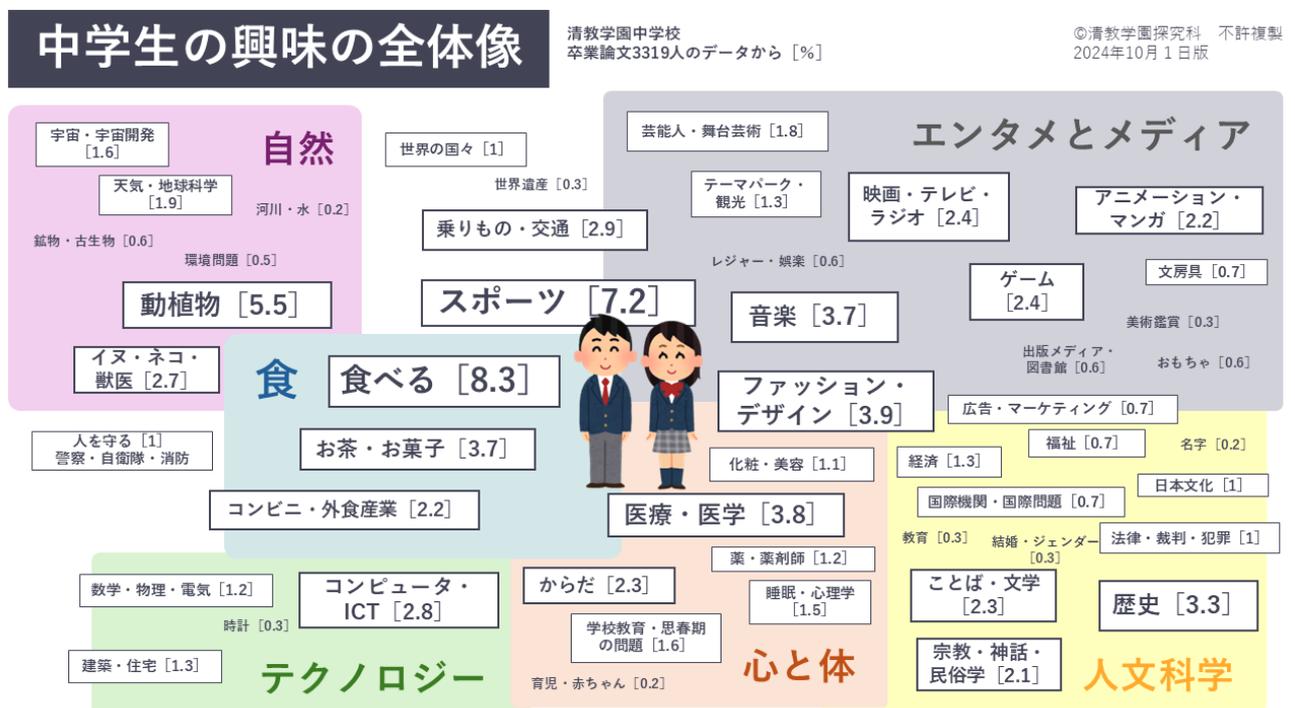
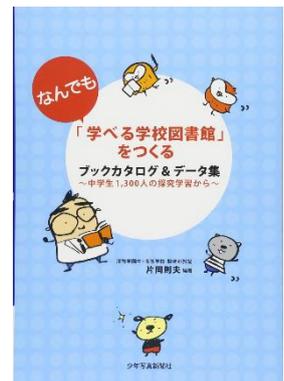
「探究学習大全」について

「中学生はどんなことに興味を持っているのか」に答える

清教学園リブラリアではこれまで『なんでも学べる学校図書館』¹などで、「探究学習で生徒たちは何を学んできたのか」「どんな本を提供したらいいのか」という問いに答えてきました。この本のもとになったデータは、2007年からの6年間、約1300人分でした。

一方、清教学園の探究学習は現在、「卒業論文なんでやねん」という名称となり、18年目を迎えています。参加生徒の累計も3328名と倍以上になっています。そうした中、データの分類項目の見直し作業を進め、大づかみに生徒の興味を把握するための作業を続けてきました。今回、その作業が一区切りして

「中学生はどんなことに興味を持っているのか」という問いに答える資料が生まれました（一部リストをp.3に掲載）。この資料を基に次に示す「中学生の興味の全体像」の図が作られ、さらにその中の各項目について分析が加えられるようになりました（分野「ゲーム」に関してはすでに公開しています）。私たち清教学園探究科は、こうした作業を「探究学習大全」として、順次公開する予定です。



¹ 片岡則夫編著『「なんでも学べる学校図書館」をつくる：ブックカタログデータ集』（第1巻2013年、第2巻2017年、ともに少年写真新聞社刊）

ちなみに、清教学園の探究学習の授業は、個々の生徒の興味を起点としています。自ら課題を見つけ自ら学ぶ、シンプルな自由研究です。大人は生徒のテーマ設定の先回りをしません。

なぜこうした「探究学習大全」が必要なのでしょう。それはこの試みが、探究学習の支援や図書館の蔵書構築ための基礎的な資料として有益だからです。具体的には子どもがひとりで、あるいは支援者（教師・学校司書・司書・保護者等）と、こうした図を見たり分析を読んだりして、自ら課題を見つけ自ら学ぶヒントを得るのです。あるいは、学校図書館や公共図書館のみなさんが、ノンフィクションの蔵書をよりよいものにするための手引きとして活用できます。

「中学生の興味の全体像」の見方

さて、上記の「中学生の興味の全体像」の図について解説します。中央部に「食べる [8.3]」とあります。これは「これまで探究学習に参加した 3319 人のうち、約 8.3%の生徒が食べることに関係する作品を残した」という意味です。「スポーツ [7.2]」「動植物 [5.5]」「音楽 [3.7]」などが人気なのは、中学生ならいかにもそうであろうと思わされます。ちなみにこの図の 1%を実際の数にすれば、約 33 名が学んでいる事を意味しています。スポーツはこれまでにのおおよそ 273 名が学んだとわかります。

「学校教育・思春期の問題」「お茶・お菓子」「宗教・神話・民俗学」など、項目名についてやや強引な感じを受けるかもしれません。実際、生徒の研究内容をどんな概念でまとめるか——たとえば「チョコレート」を独立させるのか、「菓子」とするのか、「食べる」に含めるのか——によって、項目名やその順位は変動します。そこで、今回は分類原理や用語の厳密さではなく、生徒や教室での使い勝手を優先して項目名を考えました。ここで言う「使い勝手を優先する」とは、「項目名を生徒の言葉に寄せる」を意味しています。つまり、「なにを研究する？ なにに興味があるの？」と生徒に質問したときに、はじめに発せられる言葉を思い浮かべ、項目名にしたというわけです。たとえば「ゲーム」「ファッション」「アニメ」「お菓子」…と、ごくざっくりしたもの言いようを生徒はしがちです。そうとなれば、支援する側は「ゲームのなに？」「ファッションのなに？」「アニメのなに？」という問いを続けるに決まっています。こうした場面で、この図を生徒に見せれば、「ゲームのどんなことを学べばいいのかの手がかり」がすぐに得られるのです。また、題材の相性から、たとえば「紅茶や日本茶と甘いものは併せて考えよう」というわけで、「お茶・お菓子」という項目をつくってもいます。さらに、ある程度の数のまとまりがあれば、その分野を概観できる図にしやすい、という理由もあります。

今回の「探究学習大全」が想定する学習者は、中学生・高校生の両方です。清教学園は中高一貫校であり、図書館を使う探究学習の授業が、中高の両方で行われているのが理由です。しかし、探究学習大全の内容が中高生にしか使えないかと言えば、そうでもありません。「子ども」という意味では小学生の調べる学習にも対応できますし、「研究」という側面に注目すれば大学生の指導にも使えるかもしれません。目の前の児童・生徒・学生や、図書館利用者に応じて、有効に活用して頂ければと思います。

ただし、数的なデータ分析は中学生 3328 名のデータをもとにしています。これに加えて、実際に生徒が考えた研究テーマや、研究の過程でのエピソードも交えて紹介します。

いまの中学生はどんな世界に生きている？

「中学生の興味の全体像」を見渡すと、そこにもグループが浮きあがってきます。「食」「自然」「テクノロジー」「エンタメ・メディア」「体と心」「人文科学」「スポーツ」です。これもまた、主観的でぼんやりしたまとまりとはいえ、ここからは現在の中学生の関心のありようが分かります。つまり、中学生は「食べる」とエンタメと部活動を中心に、同時に心や体を気かけながら、生きている」そんな傾向が見て取れます。失礼な言い方をすれば“卑近なことばかり”に興味がある、ともいえなくもないです。とはいえ、生徒にとってやりがいのある研究はそこからしか始まりませんし、そこから育った研究だからこそ難しい論文を書きぬく元気も出るのです。

ところで、この図の中には「食べる」を筆頭に1%以上の大きなグループが33あります。それらの累計が86%ですから、この33の大グループを全て解説してしまえば、生徒全体の9割弱をカバーできる計算になります。したがってこれからの「探究学習大全」は、まずは以下の表に示す33グループの分析を優先します。中学生に人気のある、つまりの本の需要があるところから攻めよう、という作戦です。

順位	項目名 学習件名 (大分類)	人数	%	順位	項目名 学習件名 (大分類)	人数	%
1	食べる	279	8.4	18	宗教・神話・民俗学	70	2.1
2	スポーツ	242	7.3	19	天気・地球科学	65	2.0
3	動植物	186	5.6	20	芸能人・舞台芸術	62	1.9
4	ファッション・デザイン	132	4.0	21	宇宙・宇宙開発	56	1.7
5	医療・医学	129	3.9	22	学校教育・思春期の問題	54	1.6
6	お茶・お菓子	125	3.8	23	睡眠・心理学	50	1.5
7	音楽	124	3.7	24	経済	46	1.4
8	歴史	111	3.3	25	建築・住宅	44	1.3
9	乗りもの・交通	97	2.9	26	テーマパーク・観光	44	1.3
10	コンピュータ・ICT	95	2.9	27	薬・薬剤師	41	1.2
11	イヌ・ネコ・獣医	92	2.8	28	数学・物理・電気	41	1.2
12	ゲーム	81	2.4	29	化粧品・美容	38	1.1
13	映画・テレビ・ラジオ	80	2.4	30	日本文化	35	1.1
14	ことば・文学	78	2.4	31	世界の国々	35	1.1
15	からだ	77	2.3	32	人を守る	34	1.0
16	コンビニ・外食産業	76	2.3	33	法律・裁判・犯罪	34	1.0
17	アニメーション・マンガ	75	2.3			2794	85.3

清教学園卒業研究 学習件名新ランキング上位33位まで(2007-2023)

探究学習が示す豊かな学びの世界

では、ここまで見てきたような探究学習の授業、「個々の生徒の興味を起点とし、自ら課題を見つけ自ら学ぶ、シンプルな自由研究」とは、どのような学びの世界なのでしょう。たしかに、生徒が選ぶのは“卑近な”題材です。「そんな身の回りを学習して何の役に立つのか？ もっと学ぶべきコトがあるはずだ」という見方もできるでしょう。一方で、この探究学習に携わる教員は、(心の内では「それが何の役に立つのか?」と思うことがしばしばありながらも)彼らを選んだテーマを否定しません。なぜなら、この授業が大切にしているのは、「興味にもとづく学びの道り」それ自体だからです。

自身の興味を学ぶ道り、その何がいいのか。ひとことで言えば子どもの世界が広がります。たとえ大人にとっては卑近に思える分野でも、専門家が書いた本を読み、著者に会って話を聞いたり、自分で調査をする中で、生徒は「言葉」を手に入れます。読んで、聞いて、考えて、相手に伝わるように書く。これら一連の学習のすべてに「言葉」が関わっているからです。こうして手に入れた豊かな言葉が、世界への扉を開けます。本や人との対話など、自分の傍らにある世界への扉は、開いてみると意外と広いのです。しかも、言葉や知識は当然複雑に繋がっています。そのことに気が付き、彼らはさらに未知なる豊かな知の世界に漕ぎ出していくのです。

もちろん自由な探究学習の経験が生徒の人生に影響を及ぼす場合も少なくありません。例えばフィールドワークを通じて知らない大人に教えを請う経験。「あなたの本を読んで考えた。さらにこんな疑問が浮かんだ」と、取材を依頼します。学問的に新しいものを発見するわけではありませんが、取材依頼や緊張のインタビューは生涯忘れえぬ経験となります。そして、質問する側だと思って取材に行ったのが、逆に大学の先生に鋭い質問で返され、同じ分野を志す者として対等に語り合えた、そんなこともあります。そのような経験が学部学科の選択の指針となる例は枚挙にいとまがありません。直接進路に影響せずとも、人生の重要な出来事として文脈づけるケースもあります。つまり、探究学習は自分の人生を自分らしく生きさせる指針となるのです。

このような探究学習を指して、それでも「自己完結的な学習だ」とする批判もあります。ふりかえって、グループの生徒が協働して対話的に社会課題の解決策を考えるようなスタイルをとる探究学習も多くあります。個人で学ぶのか、協働で学ぶのか。生徒が興味を持ったことを学ぶのか、SDGsのような社会課題を教員が生徒に与えて方向づけるのか。このような議論は、探究学習の授業設計を巡る言説の中でよくなされます。

では、自らの興味を学ぶ探究学習を、生徒はどう振り返ったのでしょうか。中学2年から高校2年にかけて4年もの間、ネイティヴハワイアの主権について考え続けた生徒がいました。彼は自身の研究論文の「おわりに」に、こんなことを書いています。

私の研究の原動力は「楽しさ」だった。好きだったハワイに関する本を図書館で楽しく読み、様々な研究テーマが生まれた。参考文献の著者に会って楽しく語らった。自分の論を読者に理解してもらえるよう何度も文章表現を検討した。そして、何よりも嬉しかったことは、読者に自分の論が伝わり、それに対して反応を頂いたことだった。誰かの心を、私の論文が動かしたのだ。探究活動は自分の興味を深めるだけでなく、様々な出会いがある。だからこそ「探究」はやめられないのである。

この生徒が特別なわけではありません。授業後のアンケートでは「授業を（後輩や自分の子どもに）受けるように勧めたいか」という問いに対し、例年8割程度の生徒が「とてもそう思う」「そう思う」と肯定的な回答をしています。研究がそれほどうまくいかなかったと思われる生徒ですら、このように答えるのです。興味で学ぶという、一見して自己完結的な行為がむしろ、世界に関与し、他者と繋がる機会を生み、さらに新しい自分の発見へと繋がる…、こうしたこの授業のよさは、子どもたちにも感じられているのです。つまり、興味を礎にした探究学習は、対話的で相互的な豊かな経験をもたらすのです。